



徳山毛利家文庫「記録所日記 111」「御蔵本日記 199」「御居間日記 55」

# 文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

14

# 象

ぞう

## 象がやってきた！

享保 14 年（1729）、8 代將軍徳川吉宗へ献上される象が、長崎から江戸へ送られます。この時の象は山陽道を歩いて江戸へ向かったため、当館所蔵の資料にも、象が通過した際の記録が残っています。萩藩・徳山藩の藩政資料を紐解いて、防長を歩んだ象の様子を見てみましょう。

### 1. 象が来るゾウ

萩藩の記録である毛利家文庫の内、41 公儀事 7（37 の 23）に、次のような象に関する記録が見えます。

2 月 14 日、長崎奉行で江戸に滞在していた渡辺永倫（ながとも）から、萩藩江戸屋敷に、家臣を一人差し出すよう指示がありました。

翌 15 日には、幕府からの指示が示されます。主なものは次のとおりです。  
①象の通り道では騒がないこと（静かな見物は可）、②竹の葉、青菜、

藁を準備すること、なお、青菜は 1 日 300 斤（後世の換算で 180 kg）食べるのでそのつもりでいること、③象用の飲み水はきれいな水を準備すること、準備できない場合は濁りのない水とすること、④船は馬 3～4 疋分の重量に耐えられるものを準備すること、⑤象の休憩場所は大きな厩を選ぶこと、ただし新築の必要はない。なお象は牛馬と同じように寝るので藁を敷くこと、⑥象の大きさは丈が 7 尺（≒2.1m）、頭から尾先まで 1 丈 1 尺（≒3.3m）、横幅 4 尺（≒1.2m）の巨体である、等々。実物の象を見たことのない江戸時代の人々へ、細かな指示が出ています。

また、象を送るにあたっては、各藩とも隣の藩との連携が不可欠です。萩藩も小倉藩や広島藩と協議を行っています。特にこの象は、関門海峡を船で渡って赤間関で陸揚げされるため、細心の注意が求められました。

### 徳山毛利家文庫

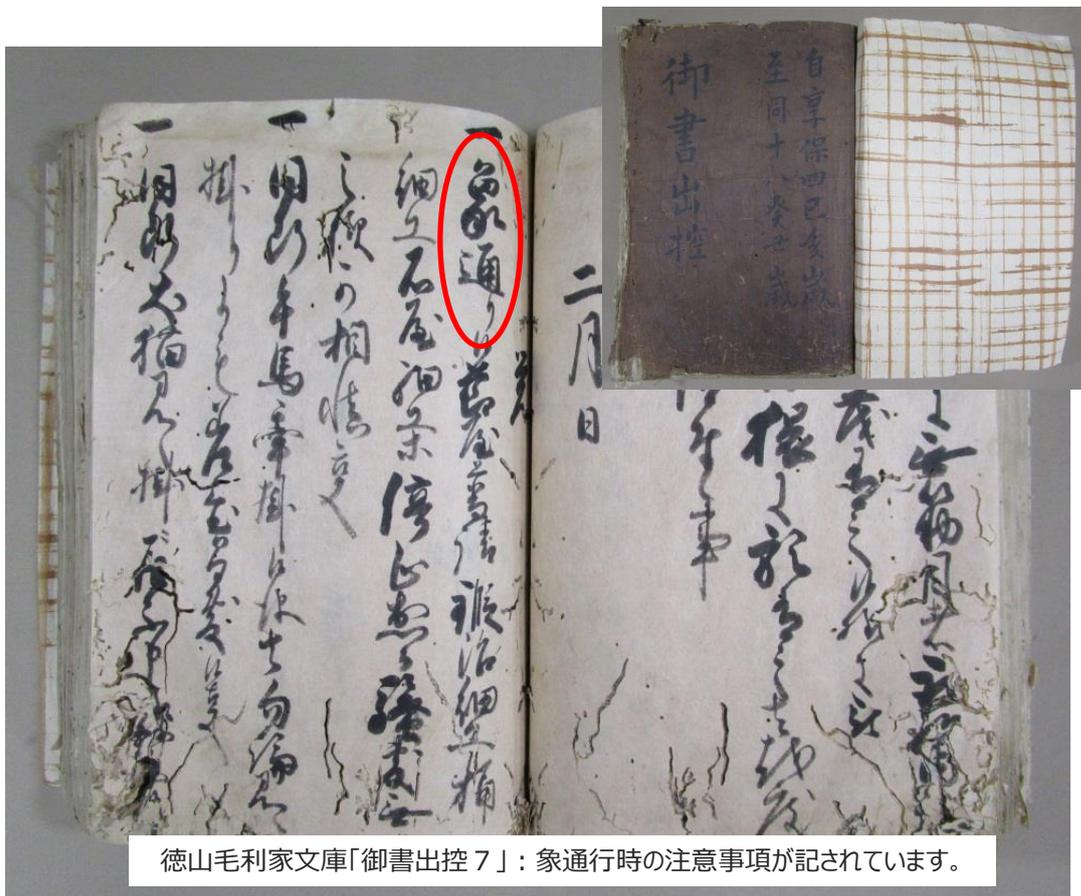


徳山毛利家文庫は、昭和 38 年（1963）に文書館に寄託された徳山藩（約 4 万石）の藩政文書です。文書の総数は約 4 万点に及びます。古くは江戸時代草創の藩成立期以来のものがありますが、文書群の中心は、藩の一時断絶後、再興がなされた享保 4 年（1719）以降のもので、またこれら藩政期に加えて、廃藩後の明治・大正期の資料も含むことから、近代華族の姿も窺うことができます。

外様小藩の資料としては、全国でも屈指の質と量があります。

この時幕府からは、象を迎えるに際して特別扱いはしないようにとの指示がありました。しかし、他藩に劣った対応は、萩藩の面目にかけてできません。そこで藩では、九州に人を派遣しその様子を報告させます。それをもとに、道や橋の補修を命じました。

なお、この象は3月14日に長崎を出発、27日に赤間関、28日に吉田、29日に山中、30日に小郡、4月1日に宮市、2日に徳山、3日に玖珂市へと山陽道を東に進みます。そして4月4日に象は安芸国に入り、萩藩は無事その務めを終えたのでした。



徳山毛利家文庫「御書出控7」：象通行時の注意事項が記されています。

## 2. 象を迎えるゾウ

象を迎えるにあたり、徳山藩内に触れが出されました。それが右上の写真です。

藩からの指示は、①象の通行時は工事や作業などで大きな音をたてないこと、②牛や馬、犬や猫は象の目に触れないように心がけること、③火の用心を念入りにすること、④象のいる所から3丁前後では拍子木を打ったり、「火の用心」と声を掛けたりして歩かないこと、⑤象の見物は屋内から簾をかけて見ること、などです。当時の人々にとって、驚くほどの巨躯を持つことは知っていてもその性質が分からない象。藩は、そんな象が騒がないよう細心の注意を払っています。人々は家の中からひっそりと象を見たことでしょう。

## 3. 象を見に行くゾウ

象は、当初想定されていたスピードよりも速くあるいたようです。そこで計画が見直され、徳山到着は4月1日と予定されていました。ところが、これまでの無理がたたったのか、ここでアクシデントが発生！小郡近辺で象が足を痛めてしまい、スケジュールの変更を余儀なくされます。

そこで徳山藩は急遽、福川に象小屋を準備して象を待ち受けることとしました。ただし象の体調を考慮した

のでしょうか、この日は徳山藩領には至らず、防府の宮市での泊となりました。

翌二日、いよいよ象は徳山藩内に入ります。ちょうど帰国中であつた徳山藩5代藩主毛利広豊は、徳山の町に宿泊する象を見物に出かけます。

象が藩領西端の富海を出発したとの知らせを受けて、八ツ時（午後2時前後）にはお供のメンバーが発表、出かける準備が命じられます。その後、館を出た広豊は、一旦、西松原の「仮屋」に立ち寄って、父元次（3代藩主）の側室であつた蓮性院や、その娘で姉にあたる幸子といった身内の人々の到着を待ちました。

象は七ツ時（午後4時前後）に「宿舎」となる「御客屋」へ到着します。徳山の「御客屋」に設置された象小屋は、2間半×3間（≒約24.3㎡）、入口には2枚の開き戸があり、周囲は板で囲われたものでした。また、この時には象使いが4名同行していましたが、象小屋に隣接して彼らの「居処」（9尺×2間≒9.8㎡）も設置されています。

翌3日の朝五ツ時（午前8時前後）、象は徳山の「御客屋」を出て東に向かい、予定通り次の宿場である久保市に到着しています。

さて象の到着後、広豊らは「御客屋」へ出向いて、しばらくの間、象を見物しました。なお、この時には、粟屋内蔵らの重臣も象を見物しています。皆一同にその大きさと姿に驚いたことでしょう。